



35

「断」

断るというのは、なかなかつらい。

知人の舞台、友人の結婚式、気になっているライブ、引き受けた頼みごとなど、どれも参加したいだけに、断らなければいけないとわかると気が滅入ってしまう。

行きたい予定というのは、なぜかカレンダーの空白ではなく、ぎゅうぎゅうのところの好んでやってくる。

「さすがにそこ被る？」と、あまりにピンポイントな重なり方をしたときは、思わず笑ってしまうほどだ。

行きたさでいうと圧倒的にそっちなのに、断らざるを得ない場合もある。たとえば、楽しいお誘いがあったとして、そこに歯医者予約が被っていた、など。

「そんなのずらせばいいじゃん」と思うかもしれないけれど、案外それが難しい。なにせ身体はひとつなのだ。

断るときのメッセージにはいつも頭を悩まされる。

「また別の機会にね」と添えるけれど、次の機会はなかなかやってこない。行きたい気持ちは本物なのに、それを伝える手段がない。

だからついつい、文章が長くなる。抑えて抑えて。言い訳のようで、言い訳ではない。そうだそうだ。そんなふうにメッセージを何度も書き直している。

「行きます！」の返事なら、びっくりマークマシマシで
すぐに書けるのに。

送信ボタンを押したあと、胸の奥になにかぽつんと残る
ものがある。行きたかったな、という気持ちだろう。

断ることで、まるで相手との距離ができたように感じて
しまうのは、きっと気にしすぎだ。

行けないからといって心まで離れていくわけじゃない。
むしろ、そういうときほど普段よりその人のことを思っ
ている気がする。

今日もどこかで、大事な日を迎えている誰かがいる。
その人が笑顔だったらいい。

そんなことを思いながら、歯を磨いて眠る。